

難病にいどむ遺伝子治療

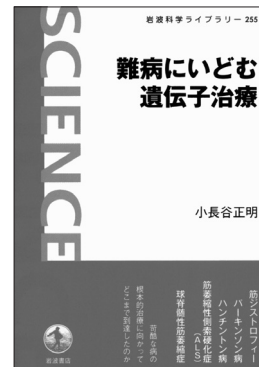
小長谷正明

岩波科学ライブラリー 255. 東京；岩波書店 2016年

ISBN：978-4000296557

国立病院機構静岡富士病院

溝口功一



平成28年10月、ある会議の際、「今度、こんな本を出すから」と、小長谷正明先生から岩波科学ライブラリー「難病にいどむ遺伝子治療」を見せていただきました。タイトルから興味がひかれましたので、読んでみたいですねとお話ししたところ、翌月、送っていただき、早速、読ませていただきました。

本書では、著者が勤務されている鈴鹿病院で、筋ジストロフィ患者との出会い、治療のできないもどかしさ、そして、原因遺伝子の発見から治療へと進展していく過程が詳しく記されています。さらに、筋ジストロフィ以外にも、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症など、いわゆる神経難病と呼ばれている疾患について、現場での経験を交えながら、疾患の歴史、臨床症状から遺伝子研究の最前線まで、わかりやすく記載されています。

私にとって懐かしかったのは、著者が「駆け出しのフレッシュ・ドクター」だった頃、「教授外来」での「ベシュライバー」の経験なども綴られていることです。また、そういえば、私も筋ジスの患者に手作りの体外式人工呼吸器を使ったことがあったなあなどと、思わず感慨にふけてしまいました。こうしたエピソードも、私には楽しいものでした。

以前、著者が書かれた「ローマ教皇検死録」（中公新書、東京；中央公論社、2001）は推理小説的な興味とともに、楽しく読ませていただきました。両著から感じることは、著者の疾患に対する深い理解と真摯な向き合い方です。さらに、今回の「難病にいどむ遺伝子治療」では、患者さんへの優しいまなざしとともに、「患者さんのために何かしてあげられることはないか」というひたむきな姿勢が伝わってきます。私たち医療人が忙しい日常で忘れがちな、しかし、医療に携わるものの原点を思い起こさせていただきました。

本書は筋ジストロフィ・神経難病の医療の進歩について、わかりやすく記載されており、医療に携わる人達だけでなく、患者さんやご家族、あるいは、医療とは無関係の方々まで、広く読んでいただける書籍です、ぜひ、ご一読ください。